

## ヘーゲルにおける論理と現実

九八

牧野 広 義

### はじめに

ヘーゲル論理学において、論理と現実との関係がどのようにとらえられているかという問題は、ヘーゲル論理学の理解にかかわる基本問題である。この問題は、ヘーゲルが彼の論理学を「形而上学」の体系であり、かつカテゴリー批判の体系として、また学問の「方法論」を示すものとして論じたことにかかわる。そこから、ヘーゲル論理学の存在論的側面と認識論的側面とをどのようにとらえるかという問題も論じられてきた。

わが国では、「ヘーゲルは論理のあゆみと現実のあゆみとを混同した」という見田石介氏のヘーゲル批判が、ひとつの有力な学説となっている。見田氏はヘーゲル論理学を唯物論的に批判しつつ、その学問方法論としての重要な意義を認め、ヘーゲルの弁証法とマルクスの弁証法との関係についても詳細な研究を行った。そして「分析的方法に基づく弁証法」という方法論の提起を行った。そのさい、ヘーゲルにおける「論理のあゆみと現実のあゆみとの混同」という論点が氏のヘーゲル批判の核心となし、ここからヘーゲルとマルクスとの相違も論じられた。

小論では、このような見田石介氏のヘーゲル論理学研究をふり返りながら、ヘーゲルにおける論理と現実との関係について再検討を行いたいと思う。

### 一 ヘーゲル論理学の性格——

#### 「本来の形而上学としての論理学」

まず最初に、ヘーゲル論理学の性格を確認しておきたい。

ヘーゲルは『大論理学』の「第一版序文」で、カントの批判によって崩壊させられた形而上学の再建を、ヘーゲル論理学の課題として明示する。「形而上学をもたない教養ある国民」とは、「多様に飾り立てられながら、本尊をもたない寺院」(IS14, 上1, 二ページ)のような奇妙な光景だと言う。そこで「本来の形而上学である論理学」(IS16, 上1, 四ページ)をヘーゲルは提起する。しかし、カントが批判した形而上学をそのまま復活させることはできない。重要な問題は、「学問的な論じ方の新しい概念」を確立し、学問の「方法」を確立することである。そのような方法をこそ、精神の弁証法的運動が示すものである。精神的弁証法的運動はすでに『精神現象学』によって示されたのであるが、それに対して、論理学では、あらゆる自然的生命や精神的生命の根底にある「純粹な本質性」(IS15, 上1, 七ページ)が内容となる。このような「純粹な本質性の自己運動」こそが、論理学の対象となり、内容となり、それがまた方法となるのである。

このような「純粹な本質性」は、『大論理学』「序論」では「客観的思想」とも表現される。ここでは次のように言われる。

「純粹学は意識の対立からの解放を前提とする。純粹学は思想が同様に事柄それ自体である限りにおいてこの思想を含むのであり、あるいは事柄それ自体が同様に純粹思想である限りにおいてこの事柄を含むのである。……このような客観的思考が純粹学の内容である」(I.S.43, 上二、三四ページ)。

こうして、『精神現象学』で論じられた意識と対象との対立を克服して、事柄そのものを把握した思想、および思想として把握された事柄が、論理学の内容となるのである。ここから、ヘーゲルは次のようにも言う。

「論理学は純粹理性の体系として、純粹思想の国として、把握されなければならぬ。この国はなんらの覆いもなく、即自かつ対自的にある真理である。この意味で、論理学の内容は、自然と有限精神の創造以前の永遠な本質の中にある、神の叙述であると表現されることが出来る」(I.S.44, 上二、三四ページ)。

このようにヘーゲルは、論理学は自然と精神の世界の「純粹な本質性」や「客観的思考」を考察するがゆえに、世界の創造以前の神の叙述として表現されると言うのである。

また、哲学的学問の方法は論理学そのものの論究に属する。なぜなら、「方法はその内容の内的な自己運動の形式についての意識」だからである(I.S.49, 上二、三九ページ)。

こうして、「客観的論理学は、思想によってのみ築かれるとされた世界についての学的構築物としての、かつての形而上学に代わるものである」(I.S.61, 上二、五三ページ)。そして、かつての形而上学を批判したカント哲学との関係では、ヘーゲル論理学こそが、形而上学を構成する諸カテゴリーの欠陥と矛盾をあばきだしながら、それを乗りこえる諸カテゴリーの導出として展開されるのである。その意味で、ヘーゲルの「客

観的論理学は、思考諸形式の眞の批判」なのである(I.S.62, 上二、五三ページ)。

以上が、ヘーゲル論理学の性格についてのヘーゲル自身の説明である。

## 二 ヘーゲル論理学の性格についての

### 見田石介氏の見解

以上のような、論理学Ⅱ形而上学Ⅱ方法論が一体となったヘーゲル論理学の意義について、見田石介氏は一九七三―七五年の講義(見田石介『ヘーゲル大論理学研究』<sup>②</sup>)で次のように述べている。

「ヘーゲル論理学の基本的性格は、まず第一に、それがたんに論理学であるだけでなく、形而上学でもあり、世界観の学でもある、そういう点にあります。それには、客観的な世界の構造とその運動法則とが語られております、すべてのカテゴリーが世界の運動の結節点という意味をもっているわけです。これが、形式論理学にはない、ヘーゲル論理学のおもしろさです。

第二に、その諸カテゴリーはアトランダムではなく、一つのものから他のものへと、必然的なたちで、弁証法的にみちびきだされ、ならべられています。それで、それぞれのカテゴリーのしめる、論理学全体の体系、認識の体系のなかでの位置がはっきりします。この位置づけによって、それぞれのカテゴリーの特殊な位置と限界も示されますから、それは同時に、カテゴリー批判にもなっているわけです。

第三に、ヘーゲル論理学のあつかうカテゴリーはおそろしく豊富で、諸科学でふつう使われるものが全部はいつています。原因とはなにか、結果とはなにか、根拠とはなにか、等々。われわれがよく知りもせず使

っているカテゴリーが、徹底的に研究されます」〔『研究』第一巻、二四ページ。編集者による小見出しは省略した〕。

さらに、見田氏は、「こういった点が、とくにわれわれに参考になるのですが、むしろこれは、観念論的にゆがめられてあらわれるのです」(同)と述べている。そして見田氏は、小論で先に見た『大論理学』「序論」の文章を解説しながら、「観念論のマイナス面」を指摘している。具体的には、論理学は「純粋学」であるという個所について、次のように述べられる。

「論理学のとりあつかう思想は、主観的なものではなく、客観的な事柄とおなじであって、またそのかぎりでのみ思想をとりあつかう。また逆にいうと、論理学のとりあつかう客観的な事柄は、偶然的なものではなく合法的なものだけけれど、それは思想や理性の合法性とおなじものだ。こういうぐあいにもみるわけです。すばらしい思想とひどい観念論、ここにはこの両方がふくまれています」(同、二五ページ。「事柄」は漢字に直し、改行は省略した)。

そして見田氏は、上記の「自然と有限精神の創造以前」の「神の叙述」については、「まずはじめに論理とか概念があつて、それが自己発展して自然と社会がとを生まみだす、というわけです。まったく転倒していません」(同)と批判している。

しかし、以上のような「講義」でのヘーゲル評価は、見田氏の以前の論文に比べてずいぶん好意的に見える。

見田氏の連載論文「ヘーゲル論理学と『資本論』」(一九七二年)<sup>③</sup>(以下では「論文」と呼ぶ)には、上記のようなヘーゲル論理学の「形而上学」や「世界観の学」への積極的な評価は見られない。ここでは、むしろ次のように言われている。

「ヘーゲル弁証法の研究というのは、当然、この観念論のまちがいを

明らかにすることをふくんでいる。むしろこのことは、ヘーゲル論理学の積極的なものを取り入れることの前提である」〔『著作集』第一巻、一一ページ〕。

このように、「論文」では、ヘーゲル批判がヘーゲルの積極的なものを取り入れることの前提であるとされている。ここから、上記の論理学は「純粋学」だという個所について、見田氏は次のように述べている。

「これはヘーゲル論理学におけるヘーゲルの二面的な立場をよくしめた言葉である。ヘーゲルの観念論は、現実の事物を思想とみ、思想をあたかも現実の事物であるかのようにとりあつかうまったく神秘的な観念論であった。ヘーゲルの弁証法は、ほかにも事情があつたが、なによりもこうした現実の事態とたんなる思想とを混同する観念論によって制限され、歪められたものとなったのである。

しかしヘーゲルのこの言葉は、もう一つの面があつて、それはヘーゲル論理学のとりあつかっている思维形式はたんなる主観的な思维の形式ではなく客観的内容をもったものだ、ということをしめしており、しかもこの思维形式のちに現実の事態をありのままに反映したいという志向をよくしめている」(同、一一―一二ページ)。

そして、後者の面に「唯物論的な要素」があるとされる。

この「論文」では、先に見た「講義」とは異なつて、まずヘーゲル批判が先行する。しかもより重要なことは、「思想」と「事柄」の同一性というヘーゲルの主張への評価が異なつていふことである。

「講義」では、「論理学のとりあつかう思想は、主観的なものではなく、客観的な事柄とおなじであつて、またそのかぎりでのみ思想をとりあつかう」という先に見た、思想と事柄の同一性については、「すばらしい思想とひどい観念論」とが一体となつていふと評価された。つまり、ヘーゲル論理学の「思想」は「世界の構造とその運動法則」を語るとい

う世界観的意義があるが、しかし同時に、ヘーゲルではその「思想」が「現実」と同一視されたり、「思想」が「現実」を創造するという観念論となるのである。

これに対して、論文では、ヘーゲルの言う「思想」と「事柄」との同一性は、「思想」と「現実の事物」との「混同」であって、この議論そのものが「神秘的な観念論」とされる。にもかかわらず、ここにどのような積極面があるかという点、「ヘーゲル論理学がとりあつかう思惟形式」は「客観的内容」をもったもので、「現実の事態をありのままに反映したいという志向」をもつものだとされる。ここでは、思想は現実の事物と同一であるという「形而上学」は観念論であるが、思惟形式が現実の事態を反映するという、その認識論的側面が評価されているのである。

この問題についての私見は後に示すことにして、見田氏のヘーゲル解釈の変化を別の側面からも見てみたい。

### 三 有論から本質論への移行について

#### (a) 有論から本質論への

#### 移行についての見田氏の解釈

見田氏の「論文」と「講義」との相違は、ヘーゲル論理学における有論から本質論への移行についての評価の相違において、いっそう明瞭になる。

見田氏は、「論文」では、「ヘーゲル論理学がカテゴリーの自己発展という形式をとっているその方法にはヘーゲルの観念論の特質がよくあらわれている」(『著作集』第一巻、一一二ページ)として、ヘーゲル『大論

理学』「本質論」の冒頭の次の文章を取り上げている。

「有は直接的なものである。知性は、真理すなわち有の即自向的な相を認識しようとするから、直接的なものとその諸規定のもとにとどまっていないで、この有の背後にはなお有そのものとは別の或るものがある。この背後のものこそ有の真理であるという前提に立って、有そのものをつらぬいていく。この認識は、媒介なしに一ぺんに本質のそばや本質のなかにあるというのではなく、別のものである有から出発して、その有を越えていく道、というよりは有のなかにはいつていく道を、あらかじめ通らなければならぬのである」(H.S.13 中、三ページ、訳文は見田氏)。

見田氏は、この文章について、これは「『有』すなわち世界の感性的な直接的な認識から本質の認識へうつったこと」を説明するものだと解釈し、「これはまったく唯物論と一致する正しい考え方である」(『著作集』第一巻、一一三ページ)としている。

しかし、ヘーゲルは右の文章に続いて次のように言う。

「だが、この運動を知識の行程と考えるとすると、この有からの出発と、この有を止場して、媒介されたものとしての本質に到着することとの進行とは有に対して外面的で、有自身の本性とは無関係な認識の活動であるように見える。けれども、この行程は有自身の運動である」(H.S.13 中、三ページ)。

このヘーゲルの議論に対して、見田氏は次のように言う。

「これはおどろくべき急転回である。ヘーゲルは現実のまったく合理的な世界からいっきよにわれわれを神秘的な天上の世界につれてゆくのである。……ここでは、有は、事柄と思想とは同一物だというヘーゲルの観念論にしたがって二つの意味、一つは現実の世界、一つは観念すなわちカテゴリーとしての有、という意味をもたらされているが、前者の

場合は、有自身の運動とは、現実の世界が自分自身で自分を抽象し分析するということであり、後者の場合は、カテゴリー自身が有から本質へ移行することである。いずれ劣らず神秘的である。」〔『著作集』第一巻、一一五ページ〕。

つまり、有から本質への移行は人間の認識の進行にもかかわらず、ヘーゲルは、これを現実の有自身が自分を分析したり、カテゴリー自身が自分で有から本質へ移行すると主張していると、見田氏は言うのである。この解釈の妥当性の検討はいったん保留しておいて、見田氏の「講義」での議論を見てみよう。

見田氏は「講義」で、ヘーゲル論理学の同じ箇所を引用して次のように言う。

「行程が客観的な有自身の運動だとか、現象が客観的に本質へといくとかそんなことはありえないわけです。しかし、これを有自身の運動というのとは一面ではおもしろいことでもあるわけです」〔『研究』第二巻、一六ページ〕。

この「おもしろいこと」について、見田氏は、マルクスが『資本論』で交換価値から価値を見いだす例をあげて、「現象形態の批判をつうじて本質に到着するプロセス」だと言う。見田氏は次のように言う。

「この運動を有自身の運動だというのは非常に神秘的ですが、それは、この運動は有にたいして外的であってはならないということでもありません。とところで有にたいして外的であってはいけないというのは、有に矛盾するような事実、首をかき上げるような事実を無視して真理にいくのではなくて、われわれはむしろそのような事実を積極的に提出して、それは外見上のことでじつはこうであるという、そのようなプロセスがなくてはならないということです。これを示すのがヘーゲルの意図です。それをかかれは観念論者だから、有自身の運動だというように表現している

のだと思います。そこでいわれていることの合理的な核心についてわれわれはおおいに注目しなければなりません。とはいえ、このばあいも、けつきよくのところ、ヘーゲルは認識のプロセスと客観的なプロセスとの区別がつかなくなっています。ここにかれの根本的な欠陥がでてくるわけです」(同、一七ページ)

「講義」ではこのように、「神秘的」なものの中に「おもしろいこと」や「合理的核心」が積極的にとりだされる。このような、「論文」と「講義」との違いについて、見田氏自身が次のように述べている。

「わたしの論文『ヘーゲル論理学と資本論』(見田石介著作集①所収)では、有の運動について、ヘーゲルの悪い面のほうをいろいろといています。こんにち、マルクス主義のなかにヘーゲル主義の悪い面がずいぶんとはいつていますので、ヘーゲルのマイナスの面をできるだけ表面にだそうと思つてそうなったのです。しかし、あそこではヘーゲルの神秘的な表現のなかに非常にいいものがふくまれてもいる面についてあまりふれることがなかったので、いまから考えると後味の悪いところがずいぶんあります」(同、二四ページ)。

このように見田氏は、「論文」ではヘーゲルの悪い面をいろいろ言つて、いい面を十分にふれることがなかったので、「後味の悪いところ」がずいぶんあると言っている。このために、「論文」で示された有から本質への移行の解釈を「講義」で見田氏自身が再検討したのである。それが先に見たように「おもしろいこと」や「合理的核心」の指摘となつたのである。しかしながら「講義」においても、「有自身の運動」については、「認識のプロセスと客観的なプロセス」との混同があり、これが「根本的な欠陥」として批判されている。

だが、ここで疑問は、見田氏が「おもしろいこと」や「合法的な核心」として評価する内容が、同時に「根本的な欠陥」をもっているとされる点

である。有論から本質論への移行が、見田氏も評価するように、現象形態から本質への認識の移行にとどまらず、「外見上のことは実はこうである」として、現象形態と本質との客観的な関係の把握になっているとすると、それは、認識の過程が客観的な関係を把握したということではないだろうか。そこに、はたして「認識のプロセスと客観的なプロセスとの混同」があるのだろうか。この点で、有論から本質論への移行が「有自身の運動」を表現されている意味を再検討する必要があると思われる。

(b) 有論から本質論への移行についての私見

私は、ヘーゲル論理学における有論から本質論への移行について、見田氏が「講義」で意義を認めた「形而上学」や「世界観の学」の側面から、つまり「客観的な世界の構造とその運動法則」の把握という側面から、別の解釈が可能であると思う。

ヘーゲルは有論から本質論への移行について次のように言っている。「この運動を知識の行程として表象すること、この有を始元とすること、およびこの有を止場して、媒介されたものとしての本質に達する進行は、有に対して外面的で、有の固有の本性とは無関係な認識の活動であるように見える。

けれども、この行程は有自身の運動である。それで、この行程において明らかにされたことは、有がその本性によって自己を内化し (sich erinnern) 、「己の自己」内行 (Insichgehen) を通して本質となるということである」(H.S.13, 中、三ページ)。

ここで述べられているように、有論では、直接的な諸規定の内容と、有論に特有な「移行」の論理が明らかにされ、「質」と「量」とを関係

させる「度量」の論理も明らかにされた。しかし、有論には関係や媒介の固有の論理はない。そこで、「有」の直接性を超えて、さらに媒介や関係そのものの論理の解明が次の課題となる。しかも媒介や関係の固有の論理は、「有」の領域を超えて、「有」の背後にある「本質」の領域として解明されるものである。そこで「有」は「本質」への移行するのである。

この行程は、確かに「有」の諸カテゴリーを分析し、また関係や媒介をとらえるより高次のカテゴリーを導き出す「認識」の過程である。しかしこの認識は「有」そのものとは無関係な、有にとって外面的な過程ではない。論理的分析が進行すると、出発点で「有」が示していた直接的な規定とは異なり、より複雑でより媒介的な規定を、「有」自身が示すことになる。実際、有論の「質」の領域でも、純粹な「有」の分析は純粹な「無」を示し、その両者の統一が「成」を示す。「成」の成果は規定された有としての「定有」となり、「定有」としての「或るもの」は「他のもの」へと移行する。「定有」として限界をもった「有限」は自らを越えて「無限」となる。ここから有限と無限とが対立する「悪無限」が生じるが、「悪無限」の矛盾は無限と有限とを統一した「真無限」によって克服される。そして他のものに関わりながら自己にとどまる「有」は「向自有」(Fürsichsein) とし示される。このような一連の過程は、ヘーゲルが言うように、決して「有」とは無関係な、「有」にとつて外面的な行程ではない。当初はまったく単純で直接的であった「有」が、その分析と展開を通してより複雑でより媒介された諸規定を示してゆくのである。そして、「有」の領域を超えて「本質」への移行するのにも、まさに「有」自身の示す本性によるのである。このことを、ヘーゲルは「有」の「内化」であり「自己内行」だと言うのである。

以上のような認識の進行と現実とのかかわりを、一つの具体例で考えてみよう。私たちが普段は遠くから眺めている森を探索するとする。森

に入っていくと、大小のさまざまな草木や動物などが見いだされる。それは新しい認識であるが、それは決して私たちの認識が作り出したものではない。森自身ももっている生態系の姿が現れるのである。また森の中にある鍾乳洞に入っていくと、森をつくっている石灰岩層が地下水によって浸食されてきたことも分かる。また、むき出しになった森の地層を調べれば、その地質構造も分かってくる。これらは森そのものや森の本性にとつて決して外面的な認識の過程ではない。森の生態系も地層の構造も、すべて森自身が示す構造なのである。

ヘーゲルが「有」の「内化」や「自己内行」として言いたかったのは、このような論理ではないだろうか。ヘーゲル論理学の諸カテゴリーは、現実世界を認識するためのものであり、かつその諸カテゴリーが現実世界の論理構造を示すのである。ヘーゲルは、カテゴリーの論理的展開によつて、カテゴリーに示される現実の構造を提示したと言えるであろう。ここで重要なことは、カテゴリーの展開による論理のプロセスを、そのまま現実のプロセスと考える必要はないということである。先にもあげた「有論」の諸カテゴリーの展開過程は、決して現実の運動の過程ではない。むしろ現実の構造を示すカテゴリーの展開である。そして、有論から本質論へと進む論理的移行も、現実の世界が「有」のカテゴリーだけでは把握できず、「本質」のカテゴリーによつて把握されなければならない論理構造をもつことを示すのである。

このように考えると、見田氏がヘーゲル論理学の根本的欠陥としてあげる「論理のあゆみと現実のあゆみの混同」ないし「論理の過程と現実の過程との混同」は、ヘーゲル論理学については必ずしも妥当しないと思われる。むしろ、マルクス主義の中で「論理と歴史との一致」ないし「認識過程と現実過程との一致」という誤解が、ヘーゲル論理学を根拠として主張されたことがあったために、見田氏は、それは悪しきヘー

ゲル主義の誤りであることを示すために、「論理のあゆみと現実のあゆみとの混同」を厳しく批判したのである。しかし、そのような批判はヘーゲル自身には必ずしも妥当しない。むしろヘーゲルは、「論理の過程は現実の構造を把握する」と主張していると言える。そして、ここにヘーゲル論理学の合理的な意味があると思われる。

以上を踏まえて、先に保留しておいた、『大論理学』「序論」での「思想」と「事柄」との同一性についても、合理的な解釈が可能であると思われる。ヘーゲル論理学は、「思想」が把握する現実の「事柄」を内容とし、また「事柄」を把握した「思想」の諸連関が論理学の体系となるのである。ここでは「思想」と「現実」の一致は必ずしも、その混同を意味しない。いわんや「論理のあゆみ」がそのまま「現実のあゆみ」であるとはヘーゲル自身も言っていないのである。

以上の意味で、見田石介氏のヘーゲル解釈が「論理の過程＝現実の過程」と呼ぶとすると、私見は「論理の過程＝現実の構造説」と呼ぶように思われる。

#### 四 本質論から概念論への移行について

##### (a) ヘーゲルの叙述と見田石介氏の解釈

ヘーゲルにおける論理と現実との関係を考えるうえで、本質論から概念論への移行も重要な問題である。この移行の論理をヘーゲルは次のように言う。

「有と本質とを考察する客観的論理学は、本来、概念の発生的提示をなす。これをさらに言えば、実体はすでに実在的な本質であり、あるいは有と合一して現実性の中に入った限りにおける本質である。したがっ

て、概念は実体をその直接的な前提としてもつのであり、概念が顕現したものであるのに対して、実体はその即目的なものである。実体の因果性と交互作用とを通じての弁証法的運動は、それゆえに概念の直接的な発生 (Genesis) であり、これによって概念の生成 (Werden) が叙述される。けれども、概念の生成は、生成一般の場合と同様に、移行していくもののその根拠への反省という意味をもち、また最初のものが移行していったところの、はじめは一見他者と見えるものが、この最初のもので真理をなすという意味をもっている。この意味で、概念は実体の真理である」(II, §245f.; 下、六ページ)。

このヘーゲルの議論について、見田石介氏は「論文」で次のように述べている。

「概念的な認識もすぐにえられるものではなく、より低い本質的認識のふじゅうぶんさをわれわれが痛感することをつうじてだけえられる、もしそうでなければ、真理としての概念をあたえられてその形骸だけを与えるだけだということを知っていることがわかる。『因果性と交互作用とを通じての実体の弁証法的運動』というのは、この本質的認識のゆきづまりを感じて概念的認識へ移行することである。また発生的展開というのは、マルクスの貨幣の発生的展開と同じに、その定在の必然性をそのいかにして、なぜ、なにによってを証明することである。

これはきわめて重要な弁証法であるが、しかしこの実体、因果性などのふじゅうぶんさはいったいだれが感じるのであろうか。それはもちろん実体や因果性といったカテゴリーそのものではなく、人間が、しかも本質的認識にとどまっているか、現実の弁証法的な事態にぶつかってその説明に窮した場合だけである。しかし、現実と思想を混同するヘーゲルの観念論は、これがなにか概念自身の仕事であるかのようにならぬ、だがマルクスのたとえば貨幣の発生的展開のような客観的な過程の場合

とこれはちがっているにもかかわらず、実体は概念の『即目的なもの』(萌芽) だとするのである」(『著作権』第一巻、一一八ページ)。

また、見田氏は、「本質的認識のふじゅうぶんさ」から「概念的認識」の移行について、次のようにも論じている。

「それ〔本質的認識〕はまだ、二元的な見方である。二つのものが相互制約し、相互作用するといっても、それは有機的統一性、個性性というものをとらえていないし、原因と結果という見方も、まだ、二つのものの関係であって、目的の主観とか発展とかいう一つの事態をつかむことができない。そこにこれらの関係のふじゅうぶんさがあるが、じつは概念的認識こそ本質的認識の真理であり、根底であって後者はたんにそのモメント、一側面、表面の現象形態にすぎない、とみるのが、本質から概念の移行である」(同、一一七ページ)。

このように見田氏は、実体・因果・相互作用などの本質的認識の不十分性の認識から、より高次の概念的認識へと、人間の認識が移行するにもかかわらず、「現実と思想を混合する」ヘーゲルは、この移行を概念自身の仕事だととらえる、と批判している。ここでは、先に見た有論から本質論への移行についての「論文」での評価と同じく、カテゴリー批判の認識論的過程は「重要な弁証法」であるが、それを現実の客観的過程ととらえることは「観念論」だとされている。

しかし「概念論」については見田氏の「論文」と「講義」の比較はできない。見田氏は「本質論」までの講義を終えた直後に逝去された。もしも、見田氏が「概念論」まで「講義」を行っていたならば、先にみた有論から本質論への移行の再検討と同じく、ヘーゲル論理学の「形而上学」や「世界観の学」としての側面をふまえて、「客観的な世界の構造とその運動法則」という側面からの解釈も行われたと思われる。しかし、そのさいも、ヘーゲルは「論理の過程と現実の過程を混同した」という



批判は維持されたと思われる。

(b) 本質論から概念論への移行についての私見

そこで、この問題についても私見を述べたいと思う。ヘーゲルは、本質論から概念論への移行においても、認識の過程と現実の過程とを混同しているわけではないと思われる。またヘーゲルは、もっぱら実体・因果性・相互作用の不十分性の認識に基づいて、より高い認識として概念へと移行したのではないと思われる。

ヘーゲルは、「実体の因果性と相互作用とを通じた弁証法的運動」について、次のように説明している。

「実体はその反対者の中においてのみ自己自身と同一なのであり、そしてこのことが二つのものとして定立された実体の絶対的な同一性をなす。……原因は自分自身の他者〔結果〕の中で、そのままただ自分と合致する。……相互作用は、原因が原因としてある因果性の仮象の啓示である。すなわち、仮象〔実体の二元性〕が仮象であることの啓示である。この無限な自己自身への反省が、すなわち即自かつ向自有はそれが定立された有であることによってはじめて存在するということが、実体の完成である。しかし、実体の完成はもはや実体そのものではなく、より高次のものであり、概念であり、主体である」(H.S. 278f, 下、九ページ〔内は牧野の補足〕。

ヘーゲルは、「本質論」の「絶対的相関」において、まず第一に、実体が偶有の変化を通じて自己同一にとどまる「実体性の相関」を論じた。そして第二に、能動の実体が原因となって作用して、受動の実体を結果として産出する「因果性」を論じた。さらに第三に、能動の実体は受動の実体を産出するだけでなく、受動の実体が能動の実体に反作用し、実

体が相互に作用し合う「相互作用」を論じた。この過程の展開は、実体は自己の他者の中で自己と合致し、能動の実体もそれ自身で自立的であるのではなく、実体相互の関係の中で定立されることを明らかにする。ここから、他者への関係と自己への関係を統一した実体の論理がだいに明らかになる。それは、「二つのものとして定立された実体の絶対的な同一性」を示す論理であり、より高度な「一つの実体」の論理となる。ヘーゲルは、このような実体の完成は、もはや実体そのものではなく、「概念」であり、「主体」であるというのである。このような移行の論理を経て、「概念論」では、「概念」の自己同一性(普遍性)・他者との関係性(特殊性)・両者の統一性(個別性)という三契機から把握され、そのような「主体」の論理が展開されるのである。

以上のような概念への移行の論理は、はたしてもっぱら実体・因果性・相互作用の不十分性を認識してより高い概念を認識する過程であろうか。またそれは、はたして「認識の過程と現実の過程との混同」であろうか。私はそうではないと考える。「実体性の相関」は、実体と偶有との関係を示す論理であり、現実の実体のあり方を把握する論理でもある。「因果性」は、原因が結果を産出することを把握する論理である。「因果性」をもっぱら主観的認識のカテゴリーとして理解するヒュームやカントに対して、ヘーゲルは明確な批判的意識をもっていた。「因果性」は現実の関係である。「相互作用」は実体相互の作用と反作用および相互作用を把握する論理である。そして現実の世界は「実体・因果性・相互作用」という構造をもっている。このように「絶対的相関」の諸カテゴリーは、世界を認識するためのカテゴリーでありながら、同時に世界がそのようなカテゴリーによって把握される客観的な構造をもっていることを示すのである。そして「実体↓因果性↓相互作用」という論理の進展は、「実体・因果性・相互作用」という現実の構造を把握す

るものである。ここには、カテゴリー展開による「論理の過程」現実の構造」の把握はあっても、「思想と現実との混同」も「認識の過程と客観的過程との混同」もないと思われる。

しかも、「実体↓因果性↓交互作用」へと進展する論理の過程によって、本質論に特有な二元的構造を超えて、他者へと関係しながら自己へと関係するより高次の実体、すなわち「概念」や「主体」を把握する論理の手がかりが得られるのである。この意味で、ヘーゲルは、実体はすでに「即自的には」概念だと言うのである。そして、このような論理的過程を、ヘーゲルは「実体の因果性と交互作用を通じての弁証法的運動」と言い、それが「概念の生成の叙述」だと言うのである。

見田氏が指摘するように、確かに『資本論』において論じられる、商品から貨幣が現実的に「生成する」過程と、ヘーゲル論理学において実体から概念が論理的に「生成する」過程とは明らかに異なる。しかしヘーゲルは、「実体・因果性・交互作用」のカテゴリーを分析し、関連づける論理的過程から、しだいに他者への関係と自己への関係を統一する「概念」を把握する手がかりを獲得していく。このような論理的過程をヘーゲルは「概念の発生」や「概念の生成」と言うのである。このような「発生」や「生成」の意味を明確にすれば、「思想と現実との混同」も「認識の過程と客観的過程との混同」も起こらないと思われる。

## 五 まとめ

小論では、ヘーゲルにおける論理と現実との関係について、見田石介氏の見解を検討しながら私見を述べた。私見では、ヘーゲル論理学の特有の論理展開や用語法を理解すれば、「論理の過程は現実の構造を把握するものである」と解釈できる。それは、見田氏が批判するような「思

想と現実との混同」でも「論理のあゆみと現実のあゆみとの混同」でもないと思われる。むしろ、ヘーゲル論理学の積極的側面をいっそう明らかにし、そこから大いに学ぶためにも、見田氏が「講義」で論じたように、ヘーゲル論理学における、「形而上学」||「カテゴリー批判の体系」||「学問方法論」という側面を統一的に理解する必要があると思われる。

では、ヘーゲル論理学における観念論をどのようにとらえ、どのように批判するべきであろうか。この点では、マルクスのヘーゲル批判が重要な手がかりになる。マルクスは『資本論』「第二版後書き」(一八七三年)<sup>④</sup>で次のように述べた。

「私の弁証法的方法は、ヘーゲルのそれと根本的に (Grundlage nach) 異なっているばかりでなく、それとは正反対のものである。ヘーゲルにとっては、彼が理念 (Idee) という名のもとに一つの自立的な主体にまで転化しさえした思考過程が、現実的なものの創造者 (Demiurg) であって、現実的なものはただその外的現象をなすにすぎない。私にとつては反対に、観念的なものは、人間の頭脳の中で置き換えられ、翻訳された物質的なものにほかならない」(S. 27, ①二八ページ)。

ここでのヘーゲル弁証法への批判は、ヘーゲルが論理学を「自然と有限精神の創造以前の永遠な本質の中にある、神の叙述」であると表現したことに対応する。もともと人間の思考過程である論理を「理念」という自立的な「主体」としてとらえ、それが世界を創造する神としてとらえること、ここにヘーゲルの観念論がある。それは、「イデア」が世界の原型となり、世界を創造する「デミウルゴス」となるとしたプラトンの観念論を受け継ぐものである。ヘーゲルは、プラトンよりもはるかにダイナミックに現実をとらえる論理を研究した。しかしやはりこの論理を、神の世界創造のための設計図のように描いたのである。このような

観念論が、矛盾に満ちた世界をとらえる弁証法を駆使しながら、それを「宥和」が支配する世界の解釈へと導いた。ここにマルクスのヘーゲル批判がある。

マルクスにとって、人間の思考過程は、物質的な現実を観念に転換して反映するものである。その点で、人間の思考は決して世界を創造するものではないが、しかし単に主観的なものではない。人間の思考が作り出す概念も、世界を反映するものであり、その意味で客観的な意味をもつ。このような唯物論の立場から、マルクスは『資本論』の方法を確立するにあたってヘーゲルから大いに学んだのである。

しかしながら、マルクスは、ヘーゲル論理学の合理的核心を分かりやすく論じた著作を書きたいとしながらも、それを実現することはできなかった。ヘーゲル論理学の観念論を批判しながら、その豊かな内容を取り出す作業は、今日も重要な課題として残されている。

向井俊彦氏も強調していたように、ヘーゲル弁証法を唯物論的に研究する上で、見田石介氏の業績は重要な手がかりとなる。この研究で少し

でも前進することは、見田理論の強力な支持者であった向井俊彦氏とはやや異なる結論を導き出すとしても、大きな意味では、向井俊彦氏の遺志を受け継ぐものであると、私は考えている。

## 注

- ① G. W. F. Hegel, *Wissenschaft der Logik*, I, II, G. W. F. Hegel, *Werke in zwanzig Bänden*, Bd. 5, 6, Suhrkamp Verlag. ヘーゲル『大論理学』上 一・二、中、下、武市建人訳、岩波書店、引用に当たっては、原書の巻数とページ数を、訳書の巻とページ数を記す。訳文は適宜変更している。
- ② 見田石介『ヘーゲル大論理学研究』全三巻、大月書店、一九七九—八〇年。引用では『研究』と略記し、巻数とページ数を記す。
- ③ 『見田石介著作集』第一巻、大月書店、一九七六年、所収。引用では『著作集』と略記し、巻数とページ数を記す。
- ④ Karl Marx, *Das Kapital, Erster Band*, Dietz Verlag. カール・マルクス『資本論』新日本出版社、新書版。引用では、原書のページ数と分冊数とページ数を記す。訳文は適宜変更している。

(阪南大学教授)